

岩波
講座

日本文学史 第十二卷 近代

白樺派の文学

白井吉見

岩波書店

白樺派の文学

白井吉見

『白樺』の創刊は、明治四十三年(一九一〇)四月であった。当時の同人のおもなものと、かぞえ年を示せば、

有島武郎(三十三) 正親町公和(三十) 有島生馬(二十九) 志賀直哉(二十八) 武者小路実篤(二十六)

木下利玄(二十五) 児島喜久雄(二十四) 里見淳(二十三) 柳宗悦(二十二) 郡虎彦(二十一)

いずれも学習院の同窓であるが、正親町、志賀、武者小路、木下は、それまで、回覧雑誌『望野』、つづいて同じく回覧雑誌『白樺』を出しており、児島、里見らは同『麦』、柳、郡らは同『桃園』を出していた。つまり、三つの回覧雑誌の仲間が合同して、同人雑誌『白樺』が創刊されたわけである。

『白樺』創刊号の「発刊に際して」のなかで、武者小路は、「白樺は大した雑誌ではないが、しかし気まぐれに出来たものではない。又月足らずで生れたものでもない」と書いている。まさにそのとおりであるが、いまになってみれば、当の武者小路の考えていたよりも、はるかに大きな歴史的な意味をもつものであったことは、いうまでもあるまい。わけても、やがて白樺派の中心的存在となった武者小路、志賀のふたりは、『白樺』の出来る前に、すでに、はっきりした自分の文学観をもち、それに基づく作品のいくつかが発表され、もしくは用意されていたのである。

武者小路の文学志望が、トルストイの影響に発していることは、さまざまの回想記で、みずからくりかえし語っている。トルストイを知ったのは、十八、九歳のころ、母方の叔父にあたる、勸解かたげ由小路ゆせうじ資承を通じてであった。セント事業の失敗で破産した叔父は、金田湾に面する丘の上に住んで、自分で畑をつくって、肥料を運んだり、漁師と一緒に漁に出たりするような、半農生活をおくっていた。他人に迷惑をかけたというので、酒、タバコをやめ、南京米や麦飯を食うといったふうのひとつだったらしい。武者小路が、のちに「新しき村」をはじめるとき、この叔父の生活を思い浮かべ、不安を感じなかったという。いずれにしても、この叔父の影響は見のがせないが、わけてもトルストイを教えられたことは、武者小路の生涯にとって、決定的な出来事であった。貴族でありながら、貧しい半農生活

にとびこんで行った叔父は、トルストイの翻訳本を全部そろえていた。夏休みにここへ遊びに行った武者小路は、まず、加藤直士訳の「我が宗教」「我が懺悔」をむさぼり読んだという。当時はトルストイの翻訳もすくなかったので、ドイツ語訳を丸善でさがし、見つければ片端から読むという熱中ぶりだった。トルストイの影響については、後年の回想で、こう語っている。——「自分は、今では、トルストイと根本的な考え方はちがっているとと思うが、トルストイから受けた影響からはすっかりのがれ出たわけではなく、僕の社会や人生についての考えの大部分はトルストイの影響を受けているのは事実と思う。僕はトルストイのいい弟子だとは思っていないが、僕の方ではトルストイを僕の最初の、また最大の恩師だと思っている。僕はトルストイによって自分の生活が、他人の不幸の上に継ぎ木された生活のような気がし、自分の生活が根本的にまちがっていることを教えられた。後年新しき村の仕事をはじめ、今日までこの仕事を、一日も休まずつづけて来ているのも、トルストイにまかれた種がはえなかったら、おそらく実現されなかったと思う。」

だが、まもなく上田敏(明治七年—大正五年
一八七四—一九一六)によって、マーテルリンクを知るようになったことは、このトルストイ熱中に、意外な方向をもたらしただけであつた。学習院の高等科一年のとき、邦語部委員として、武者小路と志賀のふたりは、講演を依頼してあつた上田敏を、院長菊池大麓の意向でことわらなければならぬ破目になり、つれだつて訪問したことがあつた。そのとき、上田敏は、トルストイのものでは、童話が一番永遠性があること、一番好きな文学者はマーテルリンクであることを語つた。「僕たちはそのときはじめてマーテルリンクを知つて興奮した」と、後年の武者小路は書いている。

霊と肉との二元的な対立に生涯苦しんだトルストイは、しまいには、きびしい禁慾主義の立場をとり、はては芸術を否定するところまで赴いたことは周知のとおりである。武者小路へのトルストイの影響は、生涯を決定するほどの深刻なものではあつたが、トルストイのような二元的対立の苦悩には見舞われずにすんだようである。これは、トル

ストイとともに、一方には、その中和劑ともいべきマールリンクへの強い同感の共存によつてもたらされたものとみることができる。「自分の歩いた道」では、當時を回想して、次のように語っている。

トルストイに息苦しい目にあつた僕は、マールリンクによつて、その息苦しいところだけを解除されたといつていいように思う。それはどういう意味かというところ、トルストイは相手の年齢も実力も見ずして、真理をつきつける。それはたしかに真理とは思つても実行力のないものに実行を強い、また卒業できていないものを一足飛びに卒業させるようなもので、いくぶん無理がある。マールリンクは、その人はその人の運命を自力で開いてゆくことの本当さを教えてくれたように僕には思えた。そういつてしまふのは簡単すぎるが、ともかく僕は自分をまず生かそうと考えるようになった。

トルストイという大きな木が、五十年、自己を思いきつて成長させた後で到達した境地に、自己をまだ少しも生かしたことの無い僕が、いきなり入ろうとするのには無理があつた。またこの世的な未練もあつた。また僕の性格とトルストイの性格のちがひ、ものを見る目のちがひを感じた。トルストイの言っていることにはたしかに真理がある。しかし肉体を有することにまた僕は人生の意味があると思ひ、トルストイは偉いが、自然はなお偉いと思わないわけにはいかなかつた。

人間が肉体をもつてゐるということは、それだけの人生の意味があるといふ考え、きびしく真理をかかげるトルストイは偉いが、自然はいつそう偉いといふ考え、——これが、マールリンクから学んだものであり、これによつて、トルストイから、「その息苦しいところだけを解除された」のであつた。トルストイの戒律に、ほかならぬ自然を對比することによつて、人間性のあるがままの肯定、「人間万歳」の思想をつかんだのである。トルストイから、ある意味では、逆なものを出しながら、「僕はトルストイのいい弟子だとは思つていないが、僕の方ではトルストイを僕の最初の、また最大の恩師だと思つてゐる」といふところ、トルストイとマールリンクとの、このようなむすびつけか

たに、すでにまぎれもない武者小路の本領が示されているのである。

人間性のあるがままの肯定は、武者小路にとっては、直ちに自己のあるがままの肯定にはかならなかった。たとえば、こんな話がある。トルストイが機縁となつて、徳富蘆花（明治元年—昭和二年）訪問となり、「僕は蘆花生が先生顔されずに、小さい友人として、同等の態度でいろいろ話して下さったことに感動し、また一方得意にも思い、たいへんいい感じを受けて帰つて来た」（『自分の歩いた道』）のであった。このように尊敬していた蘆花から、「荒野」（『白樺』創刊の二年前、明治四十一年四月自费出版。武者小路の最初の作品集。『彼』『二日』『聖なる恋』『隣家の話』『不幸なる恋』の五つの小説と、『人間の価値』『光の子と闇の子』などの評論、若干の詩が収められている）を贈ったとき、「食ふことに困つたことのないものには文学の仕事は出来ない」という、手きびしい批評を加えられたことがある。そのとき、「もし餓えなければ人間が駄目になるなら、悲惨な境遇にすべての人をおとす社会が一番いい社会になる。単純頭！」と腹をたてて、蘆花と絶交することにきめたいきさつが、後に「或る男」のなかに書かれている。以後、蘆花を軽蔑し、反対にドイツの金持の画家クリンゲルを尊敬するようになったという。クリンゲルの画には、肉体が罪惡としてではなく、自然として肯定されているのを知つて喜んだ。なお、クリンゲル、ベックリン、ホフマンなど、ドイツの新理想派の画が好きになったのは、「トルストイの禁慾主義から解放されたいと思つていた性的な好奇心がないとはいえなかつた」と、「自分の歩いた道」で語っている。

このように、自分に対して、否定的な契機をもたらずものは、片っぱしから断ち切り、捨て去つた。すべて、自然尊重の全的肯定の立場においてなされたわけである。この考えは、『白樺』創刊号の巻頭に寄せた「『それから』」に就てにそのまま、つながっている。

「それから」の著者夏目漱石氏は、真の意味に於ては自分の先生のやうな方である。さうして今の日本の文壇に於て最も大なる人として私に自分は尊敬してゐる、さうして「それから」は氏の作の内でも最も深い大きいも

自然の力を頭はす方法として恋が書かれてゐる。漱石氏は恋と情欲の區別を明かに知つて居られる。代助をして平岡の恋を恋でないと言はしてゐる。妻君が病氣になつた為に遊びたくなるやうな恋はないと代助は思つてゐる。平岡の恋は自然派の云ふ恋である。情慾八分の恋である。代助の三千代に対する恋は八分愛である。漱石氏は代助の恋を通して自然の力を頭はさうとされた。さうして之によつて自然の力の強いことを頭はすことに成功してゐると思ふ。しかし漱石氏はただ代助をして三千代に対して恋のみによつて行動させることを欲しなかつた。こゝに多くの道具立をされた。平岡と三千代の間の子を殺した。三千代を病氣にさせた。平岡に道楽をさせた、さうして借金させた。このことによつて代助は偏に三千代を憐み、どうかして助けたいと思ひあせるやうになつた。之によつて読者は代助と三千代に強く同情することが出来た。しかし惜しい哉、之によつて恋の力は弱められた……

自然としての恋愛と、社会としての規範とを、純粋なかたちで対立せしめるべきだといふのである。「それから」に対する、当時として、最も鋭い、正確な批評だつたといえよう。しかし、つづいて、次のように言わずにはおられなかつたのである。

終りに自分は漱石氏は何時までも今のまゝに、社会に対して絶望的な考えを持つてゐられるか、或は社会と人間の自然性の間にある調和を見出されるかを見たいと思ふ。自分は後者になられるだらうと思つてゐる。さうしてその時に自然を社会と調和させようと思ふ、社会を自然に調和させようと思ふ。さうしてその時漱石氏は眞の国民の教育者となられると思ふ。

このむすびの言葉に、武者小路の面目を、はつきり見てとることが出来る。自然と社会との調和といふときは、漱石にとつて、絶望としか考えられないものであつた。漱石の苦しんだのは、そこにかかつてゐる。「それから」の代助を狂人のように戸外にとび出させた漱石は、「門」の宗助をして、禪寺の門をくぐらせようとした。だが、それが徒

勞に終ったとき、人間の自然がエゴイズムにはかならぬことを見出した漱石は、やがて、「心」の先生を自殺にまで追いつめずにはおかなかった。「社会を自然に調和させよう」などと考えたものは、武者小路のほかにはない。いや、ほかに志賀直哉があり、長与善郎があり、『白樺』の仲間の大部分がそうであった。かれらは、もともと、社会を自然に對立するものとは考えなかった。最初から自然に調和するものとしての社会しかなかった。つまりは、かれらの前に、社会がすがたを現したことはない。すくなくとも、武者小路においては、そうだった。その意味で、漱石に対する武者小路の尊敬は、漱石の本質とはさしてかわりのないものだったということが出来る。あたかもトルストイがそうであったように。

自然の意志にしたがうということは、晩年の漱石にとって、熱烈な念願であった。だからこそ、時代と社会の不安をどれほど痛切に感じて苦しんだかは、たとえば、「それから」の第六章によっても、うかがうことができる。武者小路は、漱石から、その「息苦しいところだけを解除され」たのであった。かくて、自分の感受性、趣味、好悪のみを信頼する、不安の入りこみようなない生きかたが、そのまま、自然や人類の意志に合致するという信念がひき出されてくる。トルストイも、漱石も、武者小路にとっては、そういう考えかた、生きかたを強化するものとして、うけとられ、引継がれたのであった。こういう考えかた、生きかたの根本では、志賀も、ほとんどちがいはないということになる。

このことを、特定の歴史的社会的な事件に対する、かれらの反応のなかにたしかめてみる必要がある。

『白樺』の創刊は、最初に書いたように、明治四十三年四月であった。五月には、例の大逆事件が発覚し、明治天皇暗殺の計画を進めつつあったものとして、幸徳秋水以下のアナキストたちが捕えられた。一年へだてて、四十五年には明治天皇の死、つづいて乃木大将の殉死という事件がおこっている。この、まったく質を異にする二つの歴史的な事件を、当時の文学者はどのようにうけとったかについては、多くの人たちの努力によって、すでにこまかな調

べがついてゐる。前者に敏感な反応を示した代表的なものとして、徳富蘆花、木下杢太郎（明治一八年—昭和〇年）、石川啄木（明治一八年—明治四五年）、永井荷風（一八八五—一九一三）、夏目漱石、森鷗外（文久二年—大正二年）のあつたことは周知である。いわゆる大逆事件の衝撃について、石川啄木は、ある手紙のなかで書いてゐる。

……現在の社会組織、経済組織、家族制度……それらをその儘にしておいて、自分だけ一人合理的生活を建設しようといふことは、実践の結果、遂に失敗に終らざるを得ませんでした。その時から私は、一人で知らず知らずの間に Social Revolutionist となり、色々の事に対してひそかに socialistic な考へ方をするやうになつてゐました。丁度そこへ伝へられたのが、今度の大事件の発覚でした。恐らく最も驚いたのは、かの頑迷なる武士道論者でなくして、実にこの私だつたでせう。私はその時、彼等の信条についても、又その Anarchist, Communism と普通所謂 Socialism との区別などもさつぱり知りませんでした。兎も角も前言つたやうな傾向にあつた私、小さい時から革命とか暴動とか反抗とかいふことに一種の憧憬を持つてゐた私にとつては、それが丁度、知らず／＼自分の歩み込んだ一本路の前方に於て先に歩いてゐた人達が突然火の中へ飛び込んだのを遠くから目撃したやうな気持ちでした……

もつとも、これより前、明治四十二年十一月、「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」のなかで、彼はすでに次のように書いてゐる。

長谷川天涯氏は、嘗て其の自然主義の立場から『国家』といふ問題を取扱つた時——一見無雑作に見える苦しい胡麻化しを試みた。（と私は信ずる。）謂ふが如く、自然主義者は何の理想も解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に、秋毫も国家の存在と抵触する事がないのならば、其所謂旧道德の虚偽に對して戦つた勇敢な戦も、遂に同じ理由から名の無い戦になりはしないか。従来及び現在の世界を觀察するに當つて、道德の性質及び発達を国家といふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である。——寧ろ、日本人に最も特有なる卑

怯である。

国家！ 国家！

国家といふ問題は、今の一部の人達の考へてゐるやうに、そんな軽い問題であろうか？（昔に国家といふ問題許りではない。）

昨日迄、私もその人達と同じやうな考へ方をしてゐた。今、私にとつては、国家に就いて考へる事は、同時に、日本に居るべきか、去るべきか、といふ事を考へる事になつて来た。凡ての人はもつと突込んで考へなければならぬ。又、従来 of 国家思想に不満足な人も、其不満足な理由に就いて、もつと突込まなければならぬ。私は凡ての人が私と同じ考へに到達せねばならぬとは思はぬ。永井氏は巴里に去るべきである。然し私自身は、此頃初めて以前と今との徳富蘇峰氏に或聯絡を發見する事が出来るやうになつた。

啄木が、現在の社会組織、経済組織、家族制度をそのままにしておいて、個人の合理的生活を建設することの不可能に思い至り、道德の性質や發達を国家の組織から分離して考えることの誤りであることを知り、大逆事件の勃発によつて、それらの道すじがいよいよはつきりしてきたのであるが、この事件の与えた衝撃は、ほかの文学者にはどのようなかたちで現れたであらうか。引用した啄木の言葉の最後に、「永井氏は巴里に去るべきである」というのがある。永井氏とは荷風を指しているこというまでもない。荷風がパリから帰つてきたのは、明治四十一年であるが、この事件に觸発され、自分の文学者としての態度を述べた隨筆「花火」のなかの言葉は、しばしば引用されるので、またかと思ふ読者もあるだらう。

明治四十四年慶応義塾に通動する頃、わたしはその道すがら折々四谷の通りで囚人馬車が五六台も引続いて日比谷の裁判所の方へ走つて行くのを見た。わたしはこれ迄見聞した世上の事件の中で、この折程云ふに云はれない厭な心持のした事はなかつた。わたしは文学者たる以上この思想問題について黙してゐてはならない。小説家ゾ

ラはドレフューズ事件について正義を叫んだ為め国外に亡命したではないか。然もわたしは世の文学者と共に何も云はなかつた。私は何となく良心の苦痛に堪へられぬやうな気がした。わたしは自ら文学者たる事について甚しき羞恥を感じた。以来わたしは自分の芸術の品位を江戸作者のなした程度まで引下げるに如くはないと思案した。その頃からわたしは煙草入をさげ、浮世絵を集め、三味線をひきはじめた。わたしは江戸末代の戯作者や、浮世絵師が浦賀へ黒船が来ようが、桜田御門で大老が暗殺されようがそんな事は下民の与り知つた事ではない。——否とかく申すのは却つて長い事だと、すまして春本や春画をかいりて其瞬間の胸中をば呆れるよりは寧ろ尊敬しようと思つたのである。

ここには、文学者の責任において、日本国家の組織、性格と、人間性ないし道德の問題が問われているのであつて、このような国家のもとでは、近代の作家たることを断念して、戯作者せきさくしやに蹈晦せざるをえない決意を述べているわけである。しかし、もともと江戸情調のなかに生いたち、若い日に、夢之助と名のつて、寄席の落語の前座をつとめたことのあるという荷風であつてみれば、この決意の悲愴さも顔面どおりうけとることに疑問がある。だから、啄木が、荷風の「新帰朝者の日記」を評して、「あの作には永く東京にゐて金を使つた田舎の小都会の金持の息子が、故郷へ帰つて来て、何もせずにはぶらぶらしてゐながら、土地の芸者の野暮な事、土臭い事を、いや味たつぷりな口吻で逢ふ人毎に説いてゐるやうな趣きがある」と言っているのを思いあわせれば、「永井氏は巴里へ去るべきである」というのは、荷風に対する鋭い批評といつてよい。それにしても、荷風もまた荷風なりに、この歴史的な事件に衝撃されて、日本の国家組織と道德との關係を、文学者の責任において、切実な問題としてとりあげたことに変りはない。

鷗外もまた鷗外なりに、この事件に対処したことについては、周知のとおりである。おおかまに言えば、明治四十三年の大逆事件と、同四十五年の乃木大将の殉死と、逆の方向からの二つの事件にはさまれて、「興津弥五右衛門の遺書」をはじめとする「意地」所収の歴史小説を書いた鷗外は、啄木とは相反する方向に文学者の責任を担おうとした

ものとみていいだろう。同じく大逆事件といっても、荷風は、秘密裁判という国家の処置に、より多く衝撃を感じたのであり、啄木や鷗外は、このような事件の勃発とその根源に、それぞれ逆なたちで触発されたのであった。いずれにしても、三人の文学者が、文学者としての態度を、この事件によってはじめて決定し、もしくは表明したというわけでは無論ない。ただ、日本国家の本質、同時にこれまでの道徳の本質をさらけ出したこの事件に直面して、かれらの文学につながる問題として、自己の態度を表明せざるをえなかったわけである。なお、啄木が最も透徹した考えをもっていたことは明らかであって、当時の文学者として異例に属するが、これは啄木が当時の社会主義者たちとの交友関係からきたもので、別に不思議はない。啄木の遺稿集を批評した荒畑寒村が、『巻煙草』並びに巻末の『時代閉塞の現状』と題する論文の如きは、全く吾々の平生の議論と同じである」と言っていることによっても、その事情を察することができる。

大逆事件の被告二十四人に死刑の判決のあった翌々日にあたる明治四十四年一月二十日の日記に志賀直哉はこう書いている。

一昨日無政府主義者廿四人は死刑の宣告を受けた。日本に起つた出来事として歴史的に非常に珍らしい出来事である、自分は或る意味で無政府主義者である、(今の社会主義をいいとは思はぬが) その自分が今度のやうな事件に対して、その記事をすつかり読む氣力さえない、その好奇心もない。「其時」といふものは歴史では想像出来ない。

自分もある意味で無政府主義者であると書きながら、今度のような事件に対して、なぜ、その記事を読む氣力さえなく、好奇心もないのだろうか。メモふうのものものせいもあるうが、かんじんのところがよくわからない。いづれにしても、無関心もしくは冷淡だったことは明らかである。志賀が、足尾銅山の鉍毒地域の住民に同情して、父親と衝

突したことは、広く知られているだけに、奇異な感じがなくもない。だが、これは『白樺』の仲間として、決して例外ではなかった。そのころ、かれらは、『白樺』のロダン第七十回誕生記念号の編集に情熱を注いでいたのであった。志賀自身についていえば、性慾の問題が一番の関心事だったらしい。一月二十六日の日記に、「健康が欲しい。健康なからだは強い性慾を持つ事が出来るから。ミダラでない強い性慾を持ちたい。ゴルキーの話にある老国王も強い性慾によつて、女に愛されてゐたと書いてあつたが、自分は年寄るまで左うでなくていいが、四五十歳までは左うでありたい。いゝ子孫はそれでなければ出来はしない」と書いている。そこから、短篇「七十五歳」(後に「老人」と改題されたもの)や「濁つた頭」の構想が発している。二月一日の日記には、『濁つた頭』を書く時は、性慾の力といふ事を絶えず忘れないやうにして書かねばならぬ。Ropsの *Words* を見ても矢張り『濁つた頭』は思ふ存分書いて、非売品で出す方がよさうである」とある。つづいて、二月十日の日記には、『七十五歳』といふ老人の性慾に対する不調和の苦みを書く小説を想ふ」と出ている。ところで、明治天皇の死に対しては、七月三十日の日記に、「朝急に帰る事にして、出発、前日天子様が亡くなられたといふ事を其朝聞く。いい人らしかつたがお氣の毒であつた」とあり、あたかも隣家のおやじの死を悼んだかのようなのである。

乃木大将の殉死については、同じく九月十四日の日記に、「乃木さんが自殺したといふのを英子からきいた時、馬鹿な奴だといふ氣が、丁度下女かなにかゞ無考へに何かした時感ずる心持と同じやうな感じ方で感じられた」とある。更に十五日には、「乃木さんの死は一つのテンアテーションに負けたのである」と断じている。かれらの学習院時代の院長が、菊池大麓であつたことは前述した。その後を嗣いだ乃木大将に対して、武者小路にしろ、志賀にしろ、むしろ嫌悪感を抱いていたことは、かれらの回想記にしばしば見えている。わけでも、志賀の乃木嫌いは、かなりはげしいものだったようである。しかも、殉死といううなかたちで現れた封建道德の「息苦しさ」から、かれら自身はまったく「解除」されていたわけである。

大逆事件の判決について、その記事を読む気力も好奇心もないと言ひ、明治天皇の死を、いい人らしかったが、お気の毒だったと書き、乃木大将の殉死を、馬鹿な奴だときめつけた志賀直哉にとって、そのころの最大関心事は、健康な性欲への熱望だったのである。

ついでにいえば、明治四十四年二月号の『白樺』に発表した武者小路的一幕ものの脚本、「桃色の室」は、大逆事件を意識して書かれたものだという本多秋五の説がある。「さすがにトルストイを愛読した人の作らしく、手強い責任感を底にもつてゐる」(同氏著「白樺派の文学」と本多はいう。だが、本多も引用しているように、「一人前にならぬうちに他人様のことを考へるのは生意気ですわ」というごときセリフを「桃色の女」に言わせているのである。

志賀の鉞毒問題に対する関心についてはすでに書いたが、武者小路にしても、国家や社会の問題に無関心だったわけではない。現に、「白樺を出すまで」(『白樺』大正七年一月で次のように書いている。

僕達が高等科に居た時分は、日本の思想界の動揺してゐた時分だつた。日露戦争前後で、樗牛が盛んに書いてゐる時分だつた。トルストイの本がかなり訳された。社会主義も盛んだつた、自称予言者が輩出した。木下尚江が「火の柱」や「良人の自白」を出した。自分はこれらのものは大概読んでゐた。『平民新聞』も『無我愛』も毎号よんでゐた。それから内村鑑三のもの、綱島梁川のものなんかを。それから漱石、独歩、藤村などが小説を書き出した。蘆花生が聖地やトルストイの処に巡礼した。学習院では独逸語の先生の片山孤村が「男女と天才」をかいて興奮してゐた。経済の先生河上肇が無我愛に入る前で匿名で社会主義の批評を読売に出してゐる時分だつた。

この短い回想から察しても、武者小路は社会的関心がなかつたところではない。当時の青年として、むしろその強かつたほうではないかと思う。ただ、その社会的関心を、生きた社会に即して発展させていくのではなく、いよいよ武者小路の自己流の方向——自然の意志尊重の自己強調の方向への推進力と化した事情こそ重要であろう。

次の志賀直哉の日記は、その事情を側面から明らかにするものとみることができよう。

武者は内村先生のやうにならなければ仕合はせである。あゝいふ道は直ぐ行きづまる道だと思ふ、行きづまれば、其所で足ぶみをしてゐる。内村先生は十年年間といふもの足ぶみをしてゐるのではないだらうか。武者の考へに何所か左う感じを与へる所がある。武者は今自由になるといふ事が最も必要な事と思ふ。(明治四十四年三月二十三日)

当時の武者小路に対して、なおかつ、とらわれるな、と案じている志賀のいたことを見のがすわけにはいかない。その志賀が、自分自身について、次のように考えていたとしても自然であらう。

途々自分の仕た仕事を考へても大分気分がよくなつた。汽車の中ではルッソーを見た。ルッソーが、会つた人々から小利口だが、下らない人物と見られる所。感情は早く働いても理性が早く働かない事、然し時間と共にそれがハツキリして来る所、文章を直す癖、総てが自分の通りであつた。ルッソーが、どれ程偉いか、偉くないか知らない、それ程エライとも思はない。而して自分(今の)でもルッソー位の事はあると思つた。ルッソーより面白い所もあると思つた。

人間は——少なくとも自分は自分にあるものを生涯かゝつて掘り出せばいいのだ。自分にあるものを give する。これである。(明治四十五年三月六日)

「何々でなければならぬ」といふ考へは自分は嫌いである。かういふ意味で固定した宗教、道徳。主義。主張。を自分は嫌いである。

人間は一人々々異つたものである。或人には、「何々でなければならぬ」場合が、或人には「何々であつてはならぬ」場合がいくつもある。若し「あらねばならぬ」といふなら其人一人に左うなのである。「其人の其時に」と更に狭ばめられやう。自分は全然自由で欲しい。自分は自由で自分を出来るだけ深く掘らうと思ふ。